壁や障子だけでなくトイレにも目と耳が…悪口の弁明

札幌市医師会
新札幌パウロ病院
高階（たかしな）　俊光（としみつ）

以前本誌の『壁や障子だけでなくトイレにも目と耳が…』（北海道医報第1189号：2017年10月）の投稿の中で「教授の悪口」のことを詳しく書かなかったことがとても気になっていました。

簡単にあらましを説明しますと、恩師を囲む会で大先輩から「先生はトイレで教授の悪口を言って医局を出されたんだよね」と身に覚えのないことを聞かされました。よく聞いてみると、トイレで隣同士になった同僚に教授の悪口を言ったところ、個室にいた教授が偶然耳にしてしまい、医局長を経て広く知れ渡って大問題となったとのことでしたが、当の本人である私はまったく気づかないまま時を過ごしていたというものでした。テレビドラマで内緒で社内恋愛をしているカップルのことは、職場の皆には周知の事実なのに、知らないのは本人たちだけという場面を見たことがありますが、まさにそれと全く同じです。クジラに飲み込まれた小魚（小生）が状況を何も知らないでクジラのお腹の中（医局）でのほほんと悠長に泳いでいる小魚そのものでした。

言われてみると、医局員の歓送迎会の席で恩師から「軽口を叩くな！」と注意されたり、ゴルフ好きの先輩から「今がピークだよ」と揶揄されたりといった出来事があり、冒頭での「大先輩のお言葉」で、この３点が30年近くの歳月を経てつながって線になり、その要因は“教授への悪口”だったと知ったのです。

その教授の悪口とは、膣式子宮全摘出術の際、教授は子宮動脈を曲がりコッヘルで把持して処理していました。しかしコッヘルではなくペアンの方が愛護的ではないかと同僚に言ったことです。これは医局の先輩たちも常々に指摘していたことです。小生がたまたまトイレでお話したことが先陣を切ってしまったという形になったのです。教授は私の軽口を水に流してくれませんでした。在局中はウンと頑張ってたくさんの論文を書き、もう少し医局にいたかったのですが、先輩の言ったとおりあの時がピークでした。

「口は災いの元」と言いますから、本当に沈黙は金で、本当に壁や障子だけでなくトイレにも耳、目があるのですね。

もう半世紀も前、今と違って封建的な時代で教授はとても権威がありました。先輩から聞いた話ですが、その前の教授は生やしていた髭を女性にしか触らせなかったのですが、それを会食の席で酔った医局員が触ってしまい、その後すぐに地方に飛ばされてしまったのです。それに比べたら小生のお咎（とが）めはほとんどないに等しかったです。現在の大学病院の医局では教授が絶対的な権限を持つことはなくなりました。昔は教授の一存でこのように地方に飛ばされたり、と様々なドラマがあったものです。その教授の退官後、数年して教授宅におじゃました際、私の大好きなお酒をご馳走してくれ、「去る者が多いのに、また寄って来てくれるのは嬉しい」と言われ、その含蓄のある言葉に感激したものです。

それにしても当時“神聖”な場所は産科・分娩室の詰所の近くにあるトイレで、通常は教授が利用することは99.99％あり得ないのです。しかし事故は起こるもので、どんなに運転が上手な方がどれほど気を付けて運転していても、交通事故に遭遇する確率はゼロではありません。小生にしたらこれと同様に事故に遭ったようなものでしょうか？

小生の教授宅訪問で「教授をお慕い申しておりました」ことを理解していただければ、個室での軽口や教授にとっての悪口は帳消しになったのではと勝手に想像しています。今は医局と余り関係なく、静かにヒッソリと余生を送っていますが、今回誌面をお借りして悪口の弁明？をして曇っていた気持ちが晴れてスッキリしました。今ごろ恩師は墓の下で“帳消しにするぞ、高階、わっはっはは！”と一笑に付していてくれたらこんな嬉しいことはありません。私ももうすぐ墓の下です。